

「相中相高百年史」より
(戦時体制下の相馬中学校 7)

(2) 特別攻撃隊、敷島隊中野磐雄先輩の戦死

本土決戦が叫ばれていた 1944 (昭 19) 年 10 月 28 日、海軍省から「海軍の神風特別攻撃隊 (零戦五機) が 10 月 25 日、フィリッピン・ルソン島基地から出撃し、レイテ島東方海上のアメリカ機動艦隊に体当たり攻撃を敢行、敵空母一隻撃沈、同一隻撃破、巡洋艦一隻を轟沈した……」と発表された。その特攻隊員として先輩の「中野磐雄^(※1) 少尉も出撃して壮烈に散華、二階級特進、軍神として祭られる」と報じられた。

10 月 30 日宮本校長が全生徒、職員を前に、先輩中野磐雄さんが身をもって国に殉じたことを報じた。滅私奉公の教育を受けてきた者にとって、以前、日露や日支の戦争で広瀬中佐や爆弾三勇士等で幾分誇張されているとは云え、少年期には誰でも知るかつての美談が現実のものとなって身近にせまり、何か体が一段と引き締まるものを感じたものだった。特に上級生は京浜その他へ通年動員されているので、一、二年生だけの学校は一層末期を予感させる深刻な空気がみなぎった。

すぐに「故中野顕彰会」が結成され、馬城会が主催者となり会より 5,000 円を醸出し、建碑に尽力するのである。

先輩の壮烈な戦死は、後輩にも大きな衝撃を与え、また精神的支柱ともなるのである。

福島日東礦工業 (現・日東紡績) に通年勤労働員された五年生は、食堂入口脇にあった掲示板に貼り出された新聞記事を見て、わが先輩の殊勲に誇りを感じ、敵撃滅の闘魂を燃やしたのであった。

山田武次郎^(※2) はこの新聞記事を見た当日の日誌に

「中野先輩が敵艦ニ突入シ、散華サル、壮烈無比、実ニ感無量ナリ……」と綴った。

中野先輩に続け！ とばかりに予科練や陸軍の特別幹部候補生として勇躍入隊する級友が増えてきたが、寮で日の丸の旗に寄せ書きをし、聖堂で簡単な壮行会が行われ、工場の門まで見送る程度。福島駅ホームまでの見送りは秘密保持のため軍によって禁じられていたようであった。

12 月 5 日宇多川べりの映画館中村座で中野先輩出撃のニュース映画が母校の後輩に特別公開された。教頭の林先生から中野先輩についての紹介の後、ニュース映画を食い入る様に観た。白黒のうす暗い画面は、明け方の飛行基地を映していた。何人か出撃する特攻隊が飛行服姿で一列に整列し、隊長からの最後の訓示を受けていた。ニュースは淡々とした声でも息が止る様な、雷にでも打たれたような何とも云えない衝撃が走った。その時「あれが中野だ。あの何番目が中野だ！ 中野！！」という絶叫が館内をこだました。林教頭先生だった。その時特攻機は明けやらぬ東の空に爆音を残して一機、一機、兵隊さんの見送る中を飛び立っていった。先輩に続かなければならないと少年達は黙りこくってその顔は硬くしまっていた。

(※1) 昭和 17 年卒業 原町出身

(※2) 昭和 20 年卒業 高平出身

(※3) 昭和 2 年卒業 中村出身